

翻訳の造語：嚴復と西周の比較

哲学用語を中心に

徐 水 生

1.

嚴復（げんぶく）（1854～1921）は、福建省の侯官出身で、中国近代に有名な啓蒙思想家兼翻訳家である。彼が翻訳したハックスリー著『進化と論理』や、モンテスキュー著『法の精神』、ジュン・スチュアート・ミル著『功利主義』などの8つのテキストは、中国に初めて欧米思想を系統的に紹介したばかりか、二十世紀始めの中華民族の思想解放、東西文化の交流と融合に大きく貢献した。中国近代で有名な思想家兼教育家である蔡元培は「五十年以来、嚴復は西洋哲学紹介者の第一人者である」¹と賞賛し、著名な哲学者である馮友蘭も嚴復を「最初の西洋文化に真に詳しい思想家である」²と評価している。

西周（1829～1897）は、日本近代の重要な啓蒙思想家・哲学者であり、初めて系統的に西洋哲学と社会科学を日本に紹介した学者であるため、「近代日本の哲学の父」「百科全書式の学者」³「日本近代文化の建設者」⁴と言われている。嚴復と西周は、所属する時代と国は違うが、同じ作業に従事していた。西洋文化を紹介し、中日両国の近代化の発展によく似た重要な役割を果たしていた。それ故、彼らの翻訳の造語を比較しながら研究することは、特別な学術的意義⁵を持っていると思う。

2.

漢字文化圏の中で、西洋近代哲学の翻訳語を造語するには、中国伝統哲学と西洋哲学に関する豊かな知識が必要となる。嚴復と西周はこの条件を満たしていた。

嚴復は八歳の時から叔父の嚴厚甫に字を学び、系統的に中国の伝統文化を勉強していた。彼は自分の人生を追憶して、「私は大きくなって勉強を始めて以来、『三字経』から二十七史まで、ずっと君臣の義を習っていた。常に聞いていたので、深く言わなくてもいいし、深く考えなくてもいい」⁶と言っている。十歳の時から家館で黄少岩という儒者から四書五経や他の先秦諸子の思想を勉強し、厚い国学知識の基礎を作った。十四歳のとき父が亡くなり、船政学堂に入り、英文、数学、物理や化学及び渡航術を勉強していたが、個人的興味から、また科挙試験にも求められていたために⁷、中国伝統の哲学著作も勉強・研究し続けていた。友人への手紙の中で、彼は「『莊子』は何回読んでも飽きない。理論が書いて

あり、深刻であるため、(昔の本だが)今でもそれを超えられない⁸と書いている。1877年、厳復は清政府の最初の留学生として渡英し、1879年までポーツマス海軍大学で高等数学や物理、化学、軍事学を学んだ。留学中、彼は大量の西洋哲学、社会科学関係の著作を読み、豊かな西洋学的知識を蓄積した。1879年、厳復は帰国し、北洋水師学堂に招かれて総教習となり、その後、京師大学堂編訳局の総辦や復旦公学の大学長、京師大学堂の総監などを担任した。

西周も豊かな文化的知識を持っていた。西周は子供の頃から祖父の指導を受けて字を習い、四歳の時に『孝経』を読み、六歳で『論語』『孟子』『大学』『中庸』を読んだ。十二歳から藩学に入って厳しい漢学の訓練を受け、『周易』『尚書』『詩経』『春秋』『礼記』や『近思録』など、中国の伝統哲学思想を含む著作を熟読していた(西周『自伝草稿』を参照)。西周は自分の勉強を追憶し、「私は子供の頃から家族の教訓を受け、先生たちの指導を受け、聖賢の道理を聞くことができた」と話している。西周は『二程全書』や『正蒙』『朱子語類』などの本を繰り返し読み、「何年間もそれを読んで厳しく従っていた。しかも、その道理は正しく、添削もできない⁹」と感嘆した。二十一歳から、彼は大阪に三年間遊学し、大阪の松陰塾、岡山学校で儒学を勉強した。卒業後、彼は任培達塾の塾夫(私塾の学長)を担任し、授読教官を兼任していた。1853年7月、西周は江戸桜田門戸新橋の藩邸で儒教解釈を担当し、毎月16日の説教を担当していた。早期の家庭啓蒙や学校教育、後期の儒教教官の経歴を通じて、西周は先秦から宋明時代まで大量の著作を読み、漢学の基礎を作っていた。1862年、西周は幕命でオランダに留学し、ライデン大学で法学博士フィセリングに法学を学び、コントの実証主義哲学やミルの功利主義哲学を掌握し、カント哲学などの西洋学や自然科学の進化論なども勉強した。

厳復と西周の二人は、ともにヨーロッパに留学して西洋学を学んだが、二人とも中国の伝統哲学を簡単に否定するのではなく、理性的な批判と弁証的な止揚(厳復は論文「辟韓」で儒学を批判し、西周も朱子学を批判していた)に基づき、東西哲学の共通性と融合性を認識することができた。

例えば、『老子道德経』評語』という著作の中で、厳復は『老子』第一章「同謂之玄、玄之又玄、衆妙之門」という文章について、「西洋哲学のルールはこの十二字にある」と指摘している。老子の「玄」は「道」を指し、万物の発祥と変化の規律を意味する。厳復は西洋哲学と中国の道家哲学には一致するところがあると主張した。『老子』第二十九章「天下神器、不可為也、為者敗之；執者失之」という文章を、「老子は天下を神器とし、スペンサーは国群を有機体としている。二人は知恵者であり、認識もよく似ている」と解釈し、東西文化や古今の時代には当然差別が存在するが、老子とスペンサーは「天下」について驚くほどよく似た認識を持っていると指摘している。

これに対し、西周も同じような論点を持っている。彼によれば、哲学は西洋には「有名な哲学者が多くいる」が、東洋では孔孟によって生まれ、程朱によって繁栄し、「孔孟の

道と西洋の哲学との間には小さい相違が存在するが、ほとんど似ており、相通している。これは人間の道理によって立てられたので、四海古今の哲学は共通している¹⁰、「哲学は東洋で儒と呼び、西洋でフィロソフィーと言うが、実際にどれでも天道を明確し人間の道理を規律しているため、同じである」¹¹と指摘し、即ち儒教が代表している中国の伝統哲学と西洋の哲学を比べると、形式上には相違が存在するが、実質上では共通しており、どちらも自然規律と人生道理を探求する学問であると述べている。

3.

嚴復と西周は違う国にいたため、当然、彼らの翻訳造語にもいくつかの明白な相違点が存在している。

第一に、造語の直接意図が異なる。嚴復の意図は人民を教育し、亡国を防ぐことにあったが、西周の意図は新しい知識を広げ、新たな学を建てることにあった¹²。

嚴復の造語活動は主に日清戦争の後に行われていた。当時、中国の民族危機は非常に厳しく、帝国列強は中国を分割して占領しようとしていた。いかに亡国を防ぐのか？いかに「喪師辱国」状況を変えるのか？いかに中国を独立・富強の道に沿って走らせるのか？これらの問題は中国近代の思想家なら誰でも考えた問題であった。嚴復は張元濟への手紙の中で、「私は故郷を離れて以来、常に世の中を見ていた。しかしながらできることは何もない。やはり民衆が覚悟してくれないと、守旧にせよ維新にせよ、どれも無駄になる。政府は民衆に西洋の事情をよく知らせさえすれば、他に何をしなくても、中華民族は亡国しないだろう。たとえ不幸にも亡国したとしても、復活する日はいつか来るだろう。だから他のことを諦め、ひたすら西洋の本を翻訳するだけにする」¹³と書き、また「私が今苦勞して本を訳すのは、国人が新しい道理を理解できないからである。私はそれを翻訳することを誓い、これから頑張ってやっていきたい」¹⁴と言った。こうした事情から、翻訳原文の選択とその風格は、嚴復自身の意図と直接関係していた。例えば『天演論』の内容は、ハックスリー著『進化と論理』の序論と本論、この二篇だけであり、訳本の名称も原作名の半分であった。進化論と言えばハックスリーよりダーウィンの方が有名であり、また哲学と社会思想と言えば、ハックスリーの学説よりスペンサーの方が有名であるのに、なぜハックスリーの本を選び、修正・評論を入れながら翻訳したのだろうか？嚴復は『天演論』の序で、「ハックスリーのこの本の主旨は、主にスペンサーの『天』によって統制される理論を解釈しており、その論点は我々の祖先の理論とよく合っている。そして自身を強めて種を保全することを繰り返して強調している」¹⁵と指摘している。また本論中でも「自身を強めて種を保全する」思想を重視しており、彼によって、当時の世界は競争の激しい世界であり、強者は勝利して生きていけるが、弱者は滅亡することが主張されたのである。『天演論』が訳されると、この思想はすぐさま当時の先進知識者や革命者の指導思想となり、大きな社会反響を呼び起こした。

これに対して、西周の造語の直接的な意図は、新しい知識を導入し、新たな学を建てることにあった。例えば、西周が明治三年に私塾育英舎で講座を開くことを通じて作った『百学連環』は、百科全書と呼ばれた。この本は系統的に近代の西洋歴史学、文学、宗教学、哲学、法学、経済学、統計学及び物理学、化学、天文学、地理学と自然科学などを紹介し、英語やギリシャ語をもとにして創作した単語、例えば「帰納法」、「演繹法」、「哲学」、「真理」、「命題」、「習俗」、「心理」、「物理」、「取引」、「消費」、「消費」、「地質学」、「鉱物学」、「植物学」、「動物学」等々の漢字の新造語がたくさくあった¹⁶。西周はオランダでライデン大学の指導教官フィセリングを通じて、19世紀のフランスの哲学者であり、実証主義の創立者であるコントの学科分類の思想から影響を受けていたが、彼の日本に近代的学術体系を作る意図は明確であった。

第二に、中国の伝統哲学資源の利用については、二人の焦点は異なっていた。大まかに言うと、嚴復は道家思想を利用していたが、西周は儒学思想を使っていた。

嚴復によると、「中国の哲学はすべて『周易』、『老』と『莊』にある。昔の人がこれらの著作をよく読んでいたのは、決して理由がないわけではない。……我々はこれらの本を読むときに、我々にとって有意義なことを勉強すべきである」¹⁷。したがって、嚴復は二冊の道家思想家の評価著作を書いた。それが『「老子」評語』と『「莊子」評語』である。特に『「老子」評語』の主旨は、『ミル名学』、『群学肄言』、『群己権界論』、『社会通詮』などの哲学思想が、嚴復が西洋哲学を翻訳する際の思想基礎であったことを示すことにあった。いくつか例を挙げると、『老子』第五章「天地不仁、以万物為刍狗；聖人不仁、以百姓為刍狗」の箇所、「この四句はダーウィンの進化論と共通している。すばらしい！」という評語を書いている。『老子』第十章には、「その黄・老の哲学は、民主の国の道理である。それに基づいてやっていると、国が統制されなくても長期に存在でき、何もしなくてもすべてうまくいく；君子によって統制される国では、黄・老の哲学が認識されていない」と評語し、そして『老子』第三十章「以道佐人主者、不以兵強天下」の箇所では、「民主は、一国の主権を民が持っており、帝王は要らない。故にモンテスキューは他国を侵略するのが民主ではないと指摘した」と評価している。『老子』三十七章の評語の中で、嚴復は「老子の考えはルソーの考えと同じであり」、「下篇の八十章には、小国寡民の理想的な国を謳っている。小国寡民とは、その食を甘しとし、その服を美しとし、その居に安んじ、その俗を楽しむ。隣国相望みて、鶏犬の声相聞ゆるも、民、老死に至るまで相往来せず。このような世界は、まさにモンテスキューがその著作『法的精神』で提唱した民主の本来の姿である」と書いており、さらに『老子』第三十八章の評語には、「この章の要旨は、主に仁儀と礼儀が必要ではないことにある。このような考えはコントの主張と同じである。コントは全ての『善』は『悪』になれるが、本当の真理は『悪』ならない」と述べている。以上の例から、嚴復の道家思想的傾向が読み取れるだろう。

一方、西洋哲学を翻訳するとき、西周は儒学思想をよく使っていた。例えば「哲学」の

造語。ギリシア語で、哲学の元々の単語は「PHILOSOPHIA」であり、「知恵を愛する」を意味している。西周は中国宋代の哲学思想を参照し、「PHILOSOPHIA」を「性理学」、「理学」、「窮理学」と翻訳した。「性理」は心性、理性を意味する。「理」に関して、張載は「万物皆有理」、「理」は物質の自身に存在するルールであると認識し、二程は「理」が物事の存在理由だと解釈し、朱熹は「理」が万物の主宰であり、物質変化の推進者だと認識した。そのため、宋明時代の儒学は「理学」と呼ばれ、「窮理」は宋代哲学の重要概念であった。朱熹によれば、「窮理は物事の中に存在する究極の道理、根本の道理である」と述べている。しかし、近代哲学への理解を徐々に深めていくと、西周は上記した翻訳が相応しい訳語ではないと認識し、「PHILOSOPHIA の意味は周茂叔の『聖希天、賢希聖、士希賢（人間は賢者となることを希求し、賢者は聖者となることを希求し、聖者は天の境地を希求する）』の意味とよく似ているので、PHILOSOPHIA を直接に『希賢学』と訳したほうがいい」¹⁸と言った。その後、彼はさらに PHILOSOPHIA を「希哲学」と翻訳した。これは中国『尚書』から影響を受けたのかもしれない。『尚書・皋陶謨』に記載された大禹の話によると、「知人則哲、能官人、安民則恵、黎民懐之（人を知るは則ち哲にして、能く人を官し、民を安んずるは則ち恵にして、黎民之に懐く）」。『孔氏伝』では、「哲、知是也。無所不知、故能官人。恵、愛也。愛則民帰之（哲は、知恵である。知恵を多く持っている人は他人を官できる。恵は、愛である。庶民は愛を持っている人に心服する）」と解釈している。このように何度も繰り返して考え、最後に西周は1874年に発刊された『百一新論』で、「天道・人道を解明する PHILOSOPHIA を哲学と訳す」¹⁹と書いた。これは元々の「知恵を愛する」という意味とよく合致した造語と言えるだろう。

「理性」の造語を見ると、「REASON」は西洋哲学から生まれ、一般に概念、判断、推理などの思惟形式、あるいは思惟活動を指す。西洋理性主義の特徴は、理性認識の確実性を認め、理性認識が感性経験から生まれることを否定することにある。西周は1862年～1865年のオランダ留学期間に書いた『開題門』で、「宋代の儒学と理性主義は言い方には相違が存在するが、内容についてはよく似ている」と指摘していた。中国の宋明儒学は理性を重視し、朱熹は、「即物窮理（物に即いて理を窮める）」の方法を提出し、窮めた理が多ければ多いほど、物事の道理を全面的に把握することができると主張した。陸九淵は「反観」を強調し、人間は外に求めなくてもいいが、自分の心を「反観」しなければならないと主張した。王守仁は「致良知」説を提出し、「格物致知」を自己の心を凝視する内省的なものと解釈した。以上のような中国の哲学思想に対して、西洋学の理性主義者、例えばデカルト、ライプニッツのような大陸理性派は、感性認知だけでは物事を認識することはできず、必ず数学推理の方法で真理を追究しなければならないことを強調した。以上の比較から分かるように、確かに中国の儒学と西洋の理性主義の間に、言い方の相違があるが、理性認識が感性認識より正確だという点では共通している。さらに、西周は1870年前後に書いた『尚白筭記』に、「REASON は広い意味で言うと、『道理』と訳したほうがいい」と

明記している。1873年の著作『生性発蘊』では、「理性は道理を理解する性能である」と解釈し、1884年の著作『生性簡記』では、「理性は、英語で REASON、我々の人間の抽象作用として造語した。……理性は記性と似て知と感という二つの感覚が存在し、性と欲からも影響を受けている。理性が記性と違うところを言うと、記性は何でも受け入れるのに対して、理性は自分の感覚や欲望と抗衡・抵争することがありうる。このような抵抗があると、必ず妨害が出てくる。宋代の儒学者は『人心』と『道心』の違いを明確に分別していた。なぜかという、彼らは『誠義』の重要性をよく分かっていたからである。それゆえ陸子はこのような考えを持っていた。王陽明の良知論もこの考えを基礎とした。研究も理性的なことである。理性の質も正直であり、理性の印象も外界と繋がっているため、非常に複雑である。何の飾りもなく、何の添削もできない。純粹でしかも確実である。したがって理性は精神の主宰であるが、性と欲の闘争も永遠に続いていく」²⁰と書いている。西周の「理性」の造語は、主に西洋理性主義に基づいて行われたが、宋明哲学から影響を受けていたことも否定できないだろう。

第三に、新語の使用についても、二人は違っている。嚴復の造語は主に多くの古書を読んだ知識人を読者とした(梁啓超への手紙参照)が、西周は主に一般の庶民を対象とした。嚴復は「西洋学は数の少ない文章で深い道理を意味しているので、古い字や文章で表現するのは簡単であるが、現在、通常使われている文章で表現するのは困難である」²¹と指摘し、彼が訳した著作の中には、先秦の古い書籍に使われた単語や文章が多い²²。逆に、西周は庶民に少しでも早く西洋学を理解してもらいたいという気持ちがあったため、いつも普通の単語や文章で西洋学の著作を翻訳しており、日常生活の事例も活用してよく取り入れている。

例えば、嚴復は道家の「天道」²³で「自然規律」を表現し、『天演論』の中で「物事の発展には決まりがなく、自然規律の変化にも決まりがない。臨機応変」²⁴と指摘している。そして、彼は荀況の「人能群」の概念で「社会学」を表現し、著作『群学肄言・訳余贅語』で、「荀況先生は『民生有群』と言っていた。群は、人間の道理である。群はいくつもの分類があり、社会は法律でできた群である。社会には、商業や、工業、政治、学術など様々な存在するが、最も重要な意義は一つの国となる。私は昔六書を研究したことがあったため、古人の話と西洋学とよく似ていることが分かっている」²⁵と述べていた。

「内籀」と「外籀」は、嚴復が西洋学の「帰納」と「演繹」を現した言葉である。『天演論・自序』で、嚴復は「西洋学の有名な学説、その格物致知の方法を見ると、『内籀』と『外籀』の方法がある。内籀とは、物事の具体的なことを全般的に考察することを通じてその道理を把握することを指す。そして外籀とは、公理で物事を判断することである。これは我々の『易』と『春秋』にもある。一般規律は『隠』で『顕』を解釈するのは外籀であり、『顕』を通じて『隠』を求めるのは内籀である。この二者は真理を追求するのに最も重要な方法である」²⁶と指摘している。上述した『周易』や『春秋』は先秦の古典であり、

「内籟」と「外籟」はこの二冊の本に由来するわけではないが、嚴復の造語は明らかにその影響を受けていた。「内籟」と「外籟」を説明するために、嚴復は『老子』第四十章の「為学日益、為道日損（学を為すは日に益す、道を為すは日に損ず）」を利用し、「日益は内籟のことであり、日損は外籟のことである。日益があつて、日損が存在する」²⁷と説明している。

これ以外にも、「自由」という言葉の翻訳に、嚴復の造語の特徴がよくうかがえるだろう。最初、嚴復は「FREEDOM」を「自由」と訳し、1895年天津『直報』に発表された論文「論世変之亟」で、「西洋人によれば、民は神様によって生まれ、それぞれの権利も神様によって持たされ、自由もそうである。それ故、個々の人は自由であり、個々の国も自由であり、互いに侵害してはいけない。他人の自由を侵害すると、天理への違反になり、罪人になる。中国の道理と西洋法律の自由とよく似ているところは、自身をよく認識してから他人を評価することにある」²⁸というように、「自由」を活用していた。しかし、1905年に翻訳した『群己權界論』では、「FREEDOM」の翻訳に新たな変化が表れた。「中国の自繇（自由 訳者注）は、常に『いい加減』や、不規則などの悪い意味を持っている。しかしそれは後に付け加えられた意味であり、最初の意味とは関係ない。最初の意味は、ただ他のものに拘束されないということだけで、良い意味も悪い意味もなかった。したがって自繇は、悪くもなく良くもない。この言葉自体の意味は非常に広い。自繇の人がやりたいことがあれば、理論上から言えば、やっていけないことは何もない。例えば、ある人が世間の外に住んでいるとすれば、彼の自繇の範囲は無いではないか。良いことにせよ、悪いことにせよ、全ては自らの原因であるので、他の誰とも関係しない。しかしながら、人は群になった後は、自分も自繇であり、他人も自繇であるため、制限がなければ、強権世界のように衝突が起こってしまう。故に自分の自繇は必ず他人の自繇を限界とする。自繇という言葉は、最初に自主・障害なしを意味していたが、今はいい加減や不規則、不法、礼儀なしなどの悪い意味を持っている。これは元々の意味ではない。この著作の中には、ミルは自由の最初の意味を解釈した。柳子厚の詩『破額山前碧玉流、騷人遥駐木蘭舟。春風無限瀟湘意、欲采蘋花不自由』の中にある『自由』は、まさしく本当の意味である。由と繇は、昔から通用していた。今私は『自繇』という言葉で造語し、これから『自由』を『自繇』と訳す」²⁹。「自繇」の造語から、嚴復の真面目な学術態度を窺うことができるが、当時の社会現状に対する彼の政治態度も見えてくるだろう。

嚴復の造語の特徴に対して、西周は違った特徴を持っていた。例えば西周はミルの『論理学大系』（1843年）に基づいて西洋の論理学を紹介するときに、「帰納」と「演繹」を造語した。著作『百学連環』で、西周は「ここで新たな致知学（即ち論理学）の方法を紹介したい。この方法は英国のミルによって発明されたが、この方法を使って、学术界に大きな改革を起こして、學術の繁榮を求めていきたい。この方法とは何か？ induction 帰納法である。帰納法を知るために、まず deduction 演繹法を理解しなければならぬ。演繹法とは、

『演』は広げる・発揮することを指し、『繹』は重要なところから引っ張って全てを引き出すことを意味している。猫が鼠を食うことで言うと、猫は鼠を食べるときに、重要な頭の部分から食い始め、それから鼠の体、足と尾を食う。古代の聖賢の例で言うと、孔子は「仁知」を謳い、孟子は「性善」を強調した。孔子の全ての論述は「仁智」と離れないが、孟子の話は全部「性善」と関係する。「仁知」にせよ、「性善」にせよ、彼らはこれらを基礎として様々な道理を引き出し、広げた。その後の学者たちもそうである。『孟子』を勉強する人は『孟子』を根拠とし、『論語』を学ぶ人は『論語』を根本にする。要するに、最も重要なことから様々な道理を引き出すことは、演繹法である。帰納法は演繹法と違う。人間が魚を食うことで言うと、人間はいつも魚の最も美味しい部分を食べ、そして他の部分を食べる。細かい一部から全部へ、外部から内部へ。この帰納法を理解できれば、きっと真理も分かってくるだろう」と書き、「昔、西洋では演繹法を重視していたが、近年帰納法がますます重視されるようになってきている」³⁰と補足している。育英舎私塾で授業を行うとき、分かりやすく説明するために、西周は「猫と鼠」と「人間と魚」の例を使って演繹法と帰納法を解釈していた。適切な例とは言えないが、彼の「induction」と「deduction」への理解は正しく、翻訳も適切であったため、帰納と演繹という二つの言葉は広く使われ、今でも利用されている。

4.

嚴復と西周の哲学造語への貢献、特に前者の貢献をいかに公正に評価するかは、難しい問題である。

西周の貢献は周知の通りであり、評価もほぼ統一的である。彼は系統的に西洋哲学の知識を紹介し、「哲学」、「理性」、「主観」、「客観」、「悟性」、「現象」、「實在」、「感覚」、「知覚」、「観念」、「意識」など、大量の哲学造語は今でも広く使われており、東西哲学思想の融合と東方地域における哲学の発展に大きく貢献した。しかしながら、彼が西洋哲学思想を吸収し、哲学造語を行う際に、中国の伝統哲学から巨大の影響を受けていたことも無視できないだろう。

同様に、嚴復の貢献について、我々も現実に基づいて評価しなければならない。まず、嚴復が作った「物競」や「天沢」などの新しい単語、及び翻訳した『天演論』を代表とする著作は、当時（二十世紀初期）の人々が旧社会に対して宣戦する精神的武器となり、歴史的視角からすれば、梁啓超、魯迅、毛沢東など大量の先進的代表的人物の発展に大きな影響を与えた。また、嚴復の独自に思考しながら西洋学の原本を研究して自主的に造語した精神は賞賛すべきである。嚴復は「西洋は二三千年の学術を持っている。日本は三十年間の努力でそれを学んできた。今西洋学の日本語訳が多くある。しかし、その訳本で使われた単語は正確とは言えず、翻訳も厳密ではない。日本と近いからといって、日本語訳だけを研究する学者は、志のある好学の士ではない。侏儒は自分より背の高い人に天のこと

を聞いて、自分より高いからその話を聞いてしまう。現在中国の多くの学者はこの侏儒と同じではないか³¹と批判していた。実際に、嚴復が独自に造語した「烏托邦」や「邏輯」、「凶騰」などの言葉は、今でも使用されている。

第三に、嚴復が西洋学を翻訳する際に提出した「信・達・雅」の三標準は非常に適切であり、今でも我々の翻訳作業の現実的な標準となっている。

もちろん、現在使用されている単語の中に、嚴復が造語した単語は西周より少ない。しかし、このような複雑な文化現象に対して、我々は軍事学の「成敗で英雄を論じる」という方法で簡単に評価すべきではなく、詳細な分析に基づいて評価すべきである。その際に、被評価者の個人的な原因はもちろん、当時の社会文化の雰囲気や時代条件も考慮すべきであろう。そうすれば、評価の結果は比較的適切なものとなりうると考える。

注

- 1) 蔡元培『五十年来中国の哲学』 1923年12月。
- 2) 馮友蘭『中国哲学史新編』第六冊、151頁。
- 3) 船山信一『日本の観念論者』 日本英宝社1956年版、36、42頁。
- 4) 大久保利謙『西周全集』 日本宗高書房1981年版。
- 5) 近代東アジアの「西学東漸」史上、嚴復も西周も重要な役割を果たしており、それぞれ中国と日本における「第一人者」であった。従来、「西学」の伝播に対する二人の貢献についての系統的な検討がなされてきたが、翻訳の過程で漢字哲学術語を創造することに関する嚴復と西周についての比較研究はまだ見あたらない。本論はすなわちこのような比較の視覚からの試みである。
- 6) 王忬『嚴復集』第五冊 中華書局、1252頁。
- 7) 三十二歳から四十歳まで、嚴復は四回の科挙試験を受けた。商務印書館の『論嚴復与嚴訳名著』を参照。
- 8) 『嚴復集』第三卷、648頁。
- 9) 大久保利謙『西周全集』第一卷 日本宗高書房1950年版、3 - 5 頁。
- 10) 『復某氏書』。大久保利謙『明治啓蒙思想集』 日本筑摩書房1967年、29頁。
- 11) 『西周全集』第一卷第575頁、19頁。
- 12) 西周は「日本近代哲学の父」であり、明治期の重要な啓蒙思想家である。「明六社」の時期に、「人生三宝説」「教門論」などを著しており、それらがいずれも人民を教育し、民智を啓蒙するのに重要な枠割りを果たしたことは著者も認めるところである。しかし、本論のテーマは「嚴復と西の翻訳語に関する比較」であり、とくに西周の『百学連環』を中心に行っているものであり、西周と嚴復の全部の思想について論じるものではない。この点に関して、大久保利謙が『西周全集』第四卷の「解説」で述べた次の言葉が参考になる。「『百学連環』は私塾育英舎における学問概論の講義というべききものである。ところで、この講義が対象とする「學問」、「學術」とは、……高度の西洋近代学術 Science, Wissenschaft のことである。……内容的に専門的ではある。「童子を輪の中に入れて教育なす」とある」(592-593頁)。
- 13) 『嚴復集』第三冊、525頁。
- 14) 『嚴復集』第三冊、527頁。

- 15) 『嚴復集』第五冊、1321頁。
- 16) 『西周全集』第四卷を参照。
- 17) 『嚴復集補編』福建人民出版社2004年版、243頁。
- 18) 大久保利謙『西周全集』第四卷、146頁。
- 19) 大久保利謙『西周全集』第一卷、289頁。
- 20) 大久保利謙『西周全集』第一卷、144-145頁。
- 21) 『嚴復集』第五冊、1322頁。
- 22) 『嚴復集』第五冊、1322頁。
- 23) 『老子・七十九章』の『天道無親、常与善人』。『庄子・天地』の「有天道、有人道。無為而尊者、天道也。」
- 24) 『嚴復集』第五冊、1324頁。
- 25) 『嚴復集』第一冊、126頁。
- 26) 『嚴復集』第五冊、1320頁。
- 27) 『嚴復集』第五冊、1095頁。
- 28) 『嚴復集』第一冊、3頁。
- 29) 『嚴復集』第一冊、132-133頁。
- 30) 大久保利謙『明治啓蒙思想集』日本筑摩書房1967年版、53、54頁。
- 31) 『嚴復集』第三冊、561頁。

キーワード 嚴復 西周 哲学用語

(XU Shuisheng)